

人生は自分で描く芸術

西条市立小松中学校 3年 谷彩花

「人生は消しゴムなしで描く芸術である。」この言葉が、私は忘れられない。

これはアメリカ合衆国の政治家、ジョン・ウィリアム・ガードナーの言葉で、人生を絵画の制作に例えている。絵を描くときは、間違ったら消しゴムで消して、正しく書き直すことができる。しかし、人生にはそのような消しゴムはない。だから、やり直しは出来ないという意味だ。

何年か前、あるテレビ番組を見た。その番組は、非行を繰り返し、施設に収監されている少年少女を、刑務所に体験入所させるという内容だった。

少年達は、受刑者と一対一で面談していた。受刑者たちは、誰もが刑務所での過酷な生活や自らが犯した罪への後悔などを少年に話す。初めは、口答えばかりして、わざと余裕ありげな態度をとっていた少年達だったが、次第に真剣な顔つきに変わっていった。

一方、少女達は、複数人で話をしていた。こちらも、受刑者からは、刑務所での生活や犯した罪への後悔が語られた。そして、それに加えて、家族という存在のありがたさや家族や周りの人達への謝罪の気持ちも語られていた。

囚人達の話聞き終えた少年少女の中に、もう非行はしないと決意した子がいた。今まで家族や周りの人達に注意されても、きつく止められても非行を続けてきた子が、なぜ今日初めて会った受刑者の言うことをきいたのだろうか。それは、非行に走った少年少女達の気持ちが、受刑者達にはよく分かるからだと思う。決して普段、他人には見せない少年少女のつらく寂しい気持ちをよく理解しているからこそ、言葉が彼らに響いたのだろう。

しかし、受刑者達の話聞いても非行を止めようとしらない子もいた。番組では、体験入所後、一度親と面会し、反省が伝われば家に帰ってもよいことになっていた。ところが、一人の少女は、母親に暴言を吐いた。見ているこちらが悲しくなるような言葉を親に向かって投げつけた。それを聞いた母親は泣いて怒った。他の少年少女の親も腹を立てていた。しかし、少女は顔色一つ変えず、所員のひとと共に施設に戻っていった。人は簡単には変わらないという現実が私の胸を締めつけた。

少年少女達が、なぜ非行を繰り返すようになったのか、一人一人の詳しい事情は分からない。もしかすると、家庭環境や生活環境が関係しているのかもしれない。それが主因ならば、その環境を変えることは、現実的には容易ではない。

私はどうなのだろう。現在、家庭や学校の人間関係に大きな不満もなく、金銭的な不自由を強く感じたこともない。自分の将来に、それなりに夢や希望を抱くことが出来るし、非行については、やってはいけないことだと強く認識している。けれど、それは私が非行を犯した少年少女よりも、正義感が強く、分別のつく人間だということなのだろうか。いや、彼らとの差は、私が幸運にもストレスの少ない毎日を送ることの出来る環境にあるというだけなのではないか。

初めに、ジョン・ウィリアム・ガードナーの言葉を紹介した。人生は、その人独自の芸術作品だ。周りの環境や誰かのせいで台無しにされるなんてことが、あってはならない。

確かに人生で犯した過ちを帳消しにすることはできない。魔法の消しゴムは人生には存在しないからだ。

しかし、間違いの上に新しい色を付けることはできる。また、工夫次第で、間違いをアートの一部にしたりすることも可能だ。

だが、一人でそれをやるのは難しい。だから、新しい色を塗ろうとしている人を手伝おう。手助けをする人が増えれば増えるほど、新しい色に塗り替えようとしている人は、自分の理想の作品に近づけることが出来るようになる。私は先に、今の私は「非行については、やってはいけないことだと強く認識している」と書いたが、その思いが、嫌悪感となって、非行経験のある人達を頭から否定したり拒絶したりするようになっていないかと反省する。

私は、自分の人生を明るい作品にしたい。また、自分の作品づくりのために、相手の作品を台無しにするようなこともしたくない。人それぞれ描きたい人生は違う。もし、自分の作品を描き直したいと思う人が近くにいたなら、それを手助けできる人になりたい。もし、手助けが出来ないなら、せめて新しい色を塗る作業を邪魔せず、温かく見守ることが出来るようにしよう。私は今そう強く思う。この世に生をうけた全ての人が、自分の描きたいものを描ける明るい社会をつくる一人に私はなりたい。